

2022年11月28日

博士学位請求論文要旨

論文題名 中古漢語の使役構文の記述的研究
——魏晉南北朝期の5種の直接使役構文——

提出者 高柳浩平（中央大学大学院文学研究科中国言語文化専攻博士課程後期課程5年）

論文の要旨

1. 論文の主題及び当該研究分野における位置づけ

1-1. 論文の主題

本研究の主題は、中古早期（魏晉南北朝期）に用いられていた直接使役構文の類型を、文献資料の調査に基づいて記述的にまとめると同時に、使役研究の理論的分析の成果を取り入れて論じることで、その発達の過程と要因を実証的に明らかにすることである。研究対象としたのは、以下に挙げた5種に及ぶ直接使役構文である。例（1）は使動用法（V+O）、例（2）は使成式（V+C+O）、例（3）は“使”構文（使/令+O+V2/A）、例（4）は新兼語式（V1+O+V2/A）、例（5）は有標型新兼語式（V1+O+使/令+V2/A）である。

- (1) 小兒輩大破賊。（《世說新語・雅量》）
（小僧どもが大いに賊を破った。）
- (2) 即起斫破鼓，乃得安隱眠。（姚秦・鳩摩羅什譯《大莊嚴論經》卷十二）
（そこで起きて鼓を切り破り、穏やかな眠りを得た。）
- (3) 如作柱法，使中心齊，亦使平均。（《齊民要術・筆墨》第九十一）
（柱を作る方法と同様に、中心を整えて、また平均にする。）
- (4) 清明節前二日夜，雞鳴時，炊黍熟。（《齊民要術・殮飯》第八十六）
（清明節の前二日の夜、明け方に、黍を炊きこなす。）
- (5) 得一磨石，磨刀令利，來下而剝。（蕭齊・求那毘地譯《百喻經》卷一）
（研ぎ石を得て、刀を研いで鋭利にして、[上の階から]降りてきて剥がした。）

本研究では具体的な研究課題として、以下の3点を検討した。第一の課題は、中古早期に用いられた全種（5種）の直接使役構文の様相を明らかにして、各構文の特徴や構文間の差異を確かめることである。第二の課題は、一般文法理論の知見を取り入れて論じることで、上古期から中古早期にかけての各構文の変化の過程とその要因をとらえることである。第三の課題は、先行研究に決定的に不足していた、上古期や中古早期に成立した文献の用例調査を試みることで、各構文の出現数や、用いられた語の性質を実証的に明らかにすることである。本研究では、主に以上3つの課題に取り組むことで、「漢語史における使役構文の通時的変遷」という流れの中に、中古早期の5種の直接使役構文を体系的に位置づけることを目指した。

1-2. 当該研究分野における位置づけ

当該研究分野において本研究は、先行研究の特に手薄な部分を補い、発展させる「中古漢語の使役構文の記述的研究」として位置付けることができる。従来の研究において中古漢語の直接使役構文、とりわけ使成式を扱った論考は既に数多く存在するが、繰り返し引用され

た用例のみを用いて議論が行われてきたきらいがあった。そこで本研究では、実際に中古早期に成立した複数の文献から用例調査を行うことによって、5種に及ぶ直接使役構文の様相を実証的に確かめたうえで、より詳細な考察を加える。また、従来の研究においては、「周辺の構文に過ぎない」として、分離型（“使”構文、新兼語式、有標型新兼語式）に関する深い考察はほとんどなされて来なかったが、本稿ではこれら3形式を起点に論を展開することで、分離型の構文にも文法的意義が存在し、当時の直接使役構文における必須形式であったことを明らかにする。

さらに、当該研究分野における「漢代、或いは中古早期に使成式が成立した」という定説について各章を通じて批判的に検討して、調査範囲を広げれば、その成立時期は隋代以降と見なすのが合理的であることを論じる。

2. 論文の構成及び概要

2-1. 論文の目次

凡例と略号

論文初出一覧

序章

0. 本研究の目的と対象
1. 時代背景とその研究意義
2. 時代区分について
3. “使役”研究の概観と定義付け
4. 本研究の構成
5. 本研究で用いる文献資料

第1章 “使”構文の形式と意味

0. はじめに
1. 上古期の「使」
2. 「使」文法化の統語的要因
3. 魏晋南北朝期の“使”構文
4. 類像性(iconicity)と“使”構文
5. 本章のまとめ

第2章 新兼語式の形式と意味

0. はじめに
1. 隔開式動補構造説
2. 新兼語式説
3. 隔開式説の問題点
4. 新兼語式の形成ルート
5. 《百喻経》の統計的調査
6. 本章のまとめ

第3章 有標型新兼語式の形式と意味

0. はじめに
1. 有標型新兼語式の形成過程

2. 中古早期の有標型新兼語式
3. 有標型新兼語式と動補構造説
4. 有標型新兼語式の発展
5. 本章のまとめ

第4章 使動用法と使成式の交替関係

0. はじめに
1. 上古期の使動用法と使役連動文
2. 中古早期の使動用法と使成式
3. 中古早期における文献調査
4. 本章のまとめ

第5章 言語類型論から見る5種の直接使役構文

0. はじめに
1. 言語類型論における使役構文の形式と意味
2. 中古早期の直接使役構文の類型
3. 結果述語の性質から見る直接使役構文
4. 本章のまとめ

終章 本研究の結論と課題

用例出典

参考文献

2-2. 各章の概要

序章

序章では、本研究の目的と対象、時代背景と研究意義、時代区分、“使役”研究の概観と“使役”の定義付け、論文構成、用いる文献資料など、考察の前提となる材料をまとめた。うち、用いる文献資料に関しては、口語性の強い文献を中心に持ち上げ、特に中古早期に豊富に訳出された漢訳仏典を調査することで、当時の漢語の姿を客観的に記述することを述べた。

第1章 “使”構文の形式と意味

第1章では、上古期から中古早期にかけて大きな意味変化を生じた“使”構文（使役主＋使＋被使役主＋V2）を論じた。まず、上古期の“使”構文に文法化（grammaticalization）理論を適用して、動詞「使」の原型的意味は派遣義であり、その後、命令義を経て使動義に定まったプロセスを考察した。さらに、これをV2の意図性と動作性の減少、使役主の意図性の減少と無情物化、被使役主の意図性の減少と無情物化、の3点から考察し、文法化が生じた要因について論じた。続いて、先行研究の手薄な中古早期の文献（《世説新語》《百喻經》）の網羅的調査を試みた。その結果、使役主と被使役主は意図性を弱めて無情物化する傾向が見られ、V2は動作性と意図性を弱めて用いられる語の類型が増していることが分かるなど、「使」は上古期から中古早期にかけて着実に文法化を進行させていることが明らかとなった。そして、被使役主が総称的な「人」や代名詞「之」であったり、省略されたりする例が増加していることを、結合の類似性（原因と結果の表現間の距離が使役力の強弱という概念間の距離に対応する）を用いて解釈し、“使”構文は形式を縮約化することで、直接使役的な構造類型へと変化する過程にあったと結論付けた。

第2章 新兼語式の形式と意味

第2章では、上古期から中古早期にかけて発展して広く用いられた新兼語式 (V1+O+V2/A) 形式を論じた。まず、V2/A (A は形容詞) を結果を表す補語 (Complement) と見なして「隔開式」動補構造と捉える従来の定説について、動補構造の定義 (動詞と補語が密着していない等)、V2/A の独立性 (V2/A の直前に副詞的成分が頻繁に置かれた等)、使動用法の衰退の有無 (総体として衰退の傾向は見られない等) という3点から批判的に検討することで、同形式は動補構造ではなく、V1 も V2/A も独立性の強い動詞・形容詞を用いた新兼語式であると主張した。さらに、その形成ルートについて、V2/A が“熟”類 (典型的な自動詞・形容詞) の語の場合には複文縮約説 (因果関係を持つ複文が縮約)、“破”類 (自動・使動に両用された動詞) の語の場合には語彙交代説 (従来の兼語式中の「使」が一般動詞に交代) の2種類のルートがあったことを統計調査によって明らかにした。ただし、いずれのルートを通ったにしても、V1 と V2/A が因果関係を持っていたことに加えて、従来の兼語式中の「使」が備えていた使役義が新兼語式の V1 にも強く影響を与えるような形で、使役の読みが生じていたと考えられる。最後に、中古早期の新兼語式の文献調査の端緒として《百喻経》を網羅的に調査することで、新兼語式がどのように用いられ、形式内部の語にどのような特徴があったのかを検証した。その結果、当時の使成式の表現し得なかった用法 (V2/A が“熟”類の語の場合、或いは二音節形容詞の場合) を新兼語式が補っていることが明らかとなった。新兼語式は「過渡期の一形式」などではなく、当時の口語中の必要に応じる形で生じた「必須形式」であったと考えられる。

第3章 有標型新兼語式の形式と意味

第3章では、上古期から中古早期にかけての有標型新兼語式 (V1+O+使/令+V2/A) の内部構造について論じた。まず、同形式は漢代以前に先んじて使動義を表していた「使/令」を紐帯にして、前節と後節で因果関係を持つ複文が縮約したことによって生じたと主張した。続いて、上古期及び中古早期の10部以上に及ぶ文献から調査を行い、上古期の同形式中の V2/A に用いられたのは“熟”類 (純粋な自動詞・形容詞) の語のみであったが、中古早期に至ると V2/A に一部の“破”類 (自動・使動に両用された動詞) の語も用いられるようになるなど、構文としての生産性が増していたことを明らかにした。さらに、新兼語式と同様に V2/A の独立性は極めて高かったことから、これを従来の定説の如く分離型の動補構造と見なすのは不適であると指摘した。これまで有標型新兼語式は、説明文体的な性格の強い農書などに見られるとされていたが、文献調査の結果から、口語性の強い多数の漢訳仏典中にも用例がみられることから、文体を問わず広く用いられていた可能性が高い。

第4章 使動用法と使成式の交替関係

第4章では、上古期から中古早期にかけて最も一般的に用いられた2種の直接使役構文、すなわち使動用法と使成式について論じた。両形式は直接的な継承関係にあるとされ、中古早期にかけて使成式が使動用法に取って替わったとする説が未だ根強い。しかし、中古早期の6部の文献調査の結果から、この時期においては前代同様に使動用法が優位にあり、そもそも使成式は先行研究で述べられてきたほど多く用いられていなかったことが判明した。つまり、結果補語 (C) を用いた複合型、即ち使成式は当時成立しておらず、むしろ上古期の使役連動文 (V1+V2+O) に近い状態を保っていたことになる。これにより、使成式の成立も後の隋代以降と見なすほうが妥当であると主張し、定説に再検討を促した。

第5章 言語類型論から見る5種の直接使役構文

第5章では、第4章まで個別に論じてきた使動用法(V+O)、使役連動文(V1+V2+O)、“使”構文(使/令+O+V2/A)、新兼語式(V1+O+V2/A)、有標型新兼語式(V1+O+使/令+V2/A)の5種に及ぶ直接使役構文を、言語類型論における使役研究の理論的枠組みの中に落とし込んで相互の関連性について議論し、その特殊性を指摘した。まず、「形式と意味の一致(言語表現上において形式の小さい使役構文ほど意味として直接使役を表しやすい)」という類型論における普遍性に基づいて考察を進めると、これに適さない、より形式の大きい直接使役構文である分離型(“使”構文、新兼語式、有標型新兼語式)が生産性を持って出現していることが明らかとなった。しかし、5種の構文の結果述語に用いられた語の性質にまで踏み込んで考察すると、複合型(使動用法、使成式)には“破”類(自動・使動に両用された動詞)の語が、分離型には“熟”類(純粋な自動詞・形容詞)の語が用いられるというある程度の用法のすみ分けがなされていたことが明らかとなった。これまでの研究で「周遍的な使役構文に過ぎない」と見なされてきた分離型は、状態性の強い“熟”類の語を結果述語に用いる際の必須形式であり、加えて、一部の“破”類の語をも用いることができるなど、当時において複合型よりも使用範囲の広い形式であったと結論付けた。

終章 本研究の結論と課題

終章では、各章を改めてまとめ、続けて本研究全体を通じての結論を次の如く2点述べた。第一に、中古早期には5種にも及ぶ直接使役構文が併存して生産的に用いられていたが、結果述語の意味にまで踏み込めば、複合型(使動用法、使成式)には“破”類の語が用いられ、分離型(“使”構文、新兼語式、有標型新兼語式)には“熟”類の語が用いられるなど、用法のすみ分けが明確になされていることから、各構文に文法的意義があり、とりわけ周辺的で見なされてきた分離型も、この時代の必須形式の1つであった。

第二に、現代漢語の代表的な直接使役構文である使成式は、中古早期にはその祖型(使役連動文)が見られる一方で、なおも未熟な段階にあり、依然として使動用法が数的優位にあったことから、「魏晉南北朝期(中古早期)には使成式が成立していた」とする定説に強く再検討を促すことができた。これを「結果補語を用いた動補構造の成立時期」という観点から結論付ければ、分離型においても、また複合型においても、中古早期には未だ動補構造と見なし得る直接使役構文は成立していなかったと判断できる。

最後に、本研究における課題(後述)を挙げ、喫緊の課題として取り組むことを述べた。

3. 論文の独自性

本研究の独自性は3点ある。第一に、中古早期の直接使役構文に関する従来の研究に決定的に不足していた「記述的研究」に取り組んだことである。これまでの研究では、長年繰り返し用いられてきた僅かな用例のみを根拠として論が展開されることがほとんどであった。そのために、理論的な考察が常に先行してしまい、言語事実に基づく客観的考察が不足した結果、例えば新兼語式を動補構造と見なし、使成式の成立を魏晉南北朝期などと推断してしまっていた可能性があることは否めない。通時的な言語研究においては、常に記述的研究を尽くす必要があるということに改めて思いを致す必要がある。

第二に、一研究中において、同時代の全種の直接使役構文をまとめたことである。従来の研究では個別に取り上げられがちだった“使”構文や新兼語式を含め、「直接使役構文」とい

う枠組みの中でまとめて論じたことによって、各構文の結果述語の性質の差異を発見できた。つまり、複合型（使動用法、使成式）には“破”類の語が用いられ、分離型（“使”構文、新兼語式、有標型新兼語式）には“熟”類の語が用いられたというすみ分けである。

第三に、特に分離型の各構文において新たな形成ルートを提起するなど、各理論研究の知見を応用してまとめたことである。従来の研究では、使動用法から使成式への形成過程ばかりが注目され、その分岐の一つとして分離型が存在したかのように主張されてきた。これに対して本研究では、新兼語式に、因果関係を持つ複文が縮約した経路と従来の兼語式中の「使」が一般動詞に交替した経路の 2 つがあったことを突き止め、その他の分離型にもそれぞれ固有の形成経路が存在したことを明らかにし、分離型は複合型とは異なる文法的意義を持つ、体系上必須の形式であることを主張した。

4. 今後の課題

本研究には 2 つの課題が残されている。第一に、第 2 章（新兼語式）のように、文献資料を最初から限定して調査している章があるという点である。5 世紀後期の蕭齊時代に訳出された《百喻経》は、新兼語式と使成式 2 つの形式が併用されている点において、極めて希少な文献である。本研究では、同文献に出現する両形式について網羅的に統計調査を行い、出現数などを比較・考察した。このような研究はこれまで見られないことを踏まえれば、一定の新規性があると考えられるが、文献調査によって得られた用例数は決して十分とは言えない。従来の研究において不足していた文献調査の端緒としての役割は果たしたと考えられるが、「漢語史における使役構文の通時的変遷」という流れの中に、中古早期の 5 種の直接使役構文を明確に位置づけるためには、引き続きより多くの文献にあたって調査を進めることが重要である。

第二に、調査の対象とした動詞が当該分野において代表的なもの（「破」等）に留まっていることである。換言すれば、本研究では、中古早期当時において出現頻度の高かった動詞・形容詞については十分に調査をすることができたものの、中古早期は直接使役構文の結果述語に用いられる語の類型が大幅に増した時期であったことを踏まえれば、より多くの動詞・形容詞について言及することが求められると言える。

以上を今後の課題として、調査を継続したい。